

# 健康への道

名古屋大学総合保健体育科学センター

## 七大学戦の優勝を祝って

勝部 篤美

諸君、今年の七大学戦は、名大が総合優勝しました。何と愉快なことではないですか。

七大学戦の正式名称は「国立七大学総合体育大会」という。昭和37年に第1回が北海道大学で開催されて以来、今年で28回目を迎えた。今年の主管校（当番大学）は名大であった。従来は主管校が優勝していたことが多かったにもかかわらず、名大だけが過去に3回も機会を持ちながら、一度も優勝していないという哀れな状況だった。

しかし、さすがに、ここ2年ほどは、何が何でも優勝をと、体育会をはじめ各運動部の人たちが気合いの入った練習・準備に励んでいたようだ。大学側でも学生部の方々が種々配慮して来られたが、学生部長江藤恭二教授が各部の練習場へ直接歩を運び、激励されていたことは、選手たちを一層意気軒昂たらしめた。わたくしも幾つかの部に御一緒させていただいたが、悲願達成に向って燃えている選手諸君の熱気は相当なものだった。新体育館のできたことも大きな力になったようだ。とくにハンドボール部の練習で、その意気込みを感じたことであった。

今から約一年半ほど以前のこと、わたくしは本誌35号に、「弱くなった名大運動部といわれるが」という標題で一文を草し、その中で名大の学生数が絶対的に少ないことを挙げ、運動部を弁護したことがあった。七大学の中には入学定員の圧倒的に多い東大（約3500名）、京大（約3000名）のようなところもあれば、最少の名大（約2000名）のようなところもある。そうしたことは、当初からすごいハンディとなっていたにもかかわらず、今年の大会では、何と並いる六大学を総なめにして

しまったのだから、痛快きわまりないわけだ。

9月14日に催された七大学戦祝勝会で、前学長飯島先生が「スポーツで競り勝ったという自信を、今後の学問研究や社会での活動に生かしてもらいたい」という意味のことを述べられたが、学生スポーツとしてはこのことこそが大事なのである。名大の運動部選手諸君は、今年ほんとうにいい体験をしたね。過去27回の七大学戦で、諸君らの先輩たちが望んでも果せなかったことを、君たちはやり遂げたのだ。大学は大きいだけが能じゃない。小さい大学でも、中味は一杯つままっているぞと、大きな自信をもって、堂々と歩んでほしい。

それにしても、今年の名大の優勝には女子学生の活躍ぶりが一際目立っていた。まるで「勝ちまくっている」といってもよいほどで、硬式庭球1位、軟式庭球1位、バスケットボール1位、バレーボール2位、剣道2位、バトミントン2位、弓道3位、卓球3位という具合で、これが大きな得点源になっている。

今年3月に出された「学園だより」第77号に、工学部の藤原俊隆先生が昔ハーバード大学の総長であったコナント氏の言葉を紹介しておられるが、学生生活・学生スポーツを考えていく上で、まことにすばらしいことばだと感じ入っているのので、ここに再録させていただくことにする。

「もし大学がクラブ活動だけの場所ならば、これはカントリークラブと変りない。しかし、もし大学が学問だけを行なうところなら、研究所と同一だ。大学はその何れでもない」。

(体育科学部)